

令和元年度 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第5号（9月予報）

令和元年8月27日 秋田県病害虫防除所

<p>【内容】</p> <p>I. 予報の要点 II. 主要病害虫の向こう1か月の予報 III. 発生予報と防除対策 IV. 気象予報 V. 気象データ VI. 用語の説明</p>	<p>【問合せ先】</p> <table> <tr> <td>秋田県病害虫防除所</td> <td>018-881-3660</td> </tr> <tr> <td>秋田県農業試験場</td> <td>018-881-3326</td> </tr> <tr> <td>秋田県果樹試験場</td> <td>0182-25-4224</td> </tr> <tr> <td>かづの果樹センター</td> <td>0186-25-3231</td> </tr> <tr> <td>天王分場班</td> <td>018-878-2251</td> </tr> </table>	秋田県病害虫防除所	018-881-3660	秋田県農業試験場	018-881-3326	秋田県果樹試験場	0182-25-4224	かづの果樹センター	0186-25-3231	天王分場班	018-878-2251
秋田県病害虫防除所	018-881-3660										
秋田県農業試験場	018-881-3326										
秋田県果樹試験場	0182-25-4224										
かづの果樹センター	0186-25-3231										
天王分場班	018-878-2251										
<p>【お知らせ】</p> <p>◇今回の予報対象期間は9月を主とします。次回の発表予定は令和元年9月25日です。</p> <p>◇病害虫発生予察情報は秋田県病害虫防除所のホームページで閲覧できます。 https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/</p> <p>◇短期暴露評価により使用方法が変更された農薬があります。使用制限となる農薬の変更情報は秋田県のホームページで確認してください。https://www.pref.akita.lg.jp/suiden/</p> <p>◇農薬の登録内容は随時更新されますので、防除薬剤については指導機関に相談してください。最新の農薬登録状況の検索や、登録・失効農薬情報は独立行政法人農林水産消費安全技術センターのホームページで閲覧できます。http://www.famic.go.jp/</p> <p>◇病害虫発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのホームページで読者登録できます。http://www.e-komachi.jp/</p>											

I. 予報の要点

水 稲	<p>1回目防除後も水田内雑草が発生しているほ場などでは、アカスジカスミカメの発生量が多く推移すると予想されます。必要に応じて出穂期24日後頃に、畦畔を含めたほ場全体にエクシード剤又はキラップ剤を茎葉散布してください。本年の水稲の成熟期は早くなると予想されるため、2回目防除薬剤の使用時期に十分注意してください。</p>
大 豆	<p>マメシンクイガの発生量はやや少ないと予想されます。必要に応じて9月上旬に、1～2回の防除をしてください。</p>
野 菜	<p>ねぎ（秋冬どり）の病害ではさび病、黒斑病・葉枯病の発生量がやや多い、虫害ではネギアザミウマの発生量が多いと予想されます。特に葉枯病は収穫物の品質低下の要因となるため、定期的な防除に努めてください。</p> <p>キャベツ（秋冬どり）の虫害ではコナガ、モンシロチョウの発生量が多いと予想されます。発生が確認された場合は、速やかに防除を行ってください。</p> <p>トマトの病害では灰色かび病の発生量が多いと予想されます。予防散布に努めてください。</p>

果 樹	<p>各樹種とも収穫期を迎えるため、薬剤防除を行う際は収穫前日数に注意してください。</p> <p>りんごでは、ナミハダニの発生が多く、シンクイムシ類と果樹カメムシ類の発生がやや多いと予想されます。ナミハダニの発生が多い園地では越冬態がみられる前に防除してください。シンクイムシ類の成虫の発生が多く、夜温が高い日が続く場合はネオニコチノイド剤等を散布してください。果樹カメムシ類の飛来が多い場合には、ネオニコチノイド剤又は合成ピレスロイド剤を散布してください。</p> <p>なしの病害では、黒星病の発生がやや多いと予想されます。黒星病の発病部位は直ちに切除し、適切に処分してください。虫害では、シンクイムシ類とナミハダニと果樹カメムシ類の発生がやや多いと予想されます。シンクイムシ類の成虫の発生が多く、夜温が高い日が続く場合はネオニコチノイド剤等を散布してください。ナミハダニの発生が多い園地では越冬態がみられる前に防除してください。果樹カメムシ類の飛来が多い場合には、ネオニコチノイド剤又は合成ピレスロイド剤を散布してください。</p> <p>ぶどうでは、べと病の発生がやや多いと予想されます。発生の多い園地では銅剤を散布してください。</p>
-----	--

Ⅱ. 主要病害虫の向こう1か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期	発生量	
				現況	予報
水 稲	斑点米カメムシ類	全県	—	多い	多い
	アカスジカスミカメ			多い	多い
	アカヒゲホソミドリカスミカメ			多い	やや多い
大 豆	フタスジヒメハムシ	全県	—	やや少ない	やや少ない
	マメシンクイガ	全県	—	やや少ない	やや少ない
ね ぎ (秋冬どり)	さび病	全県	—	やや少ない	やや多い
	黒斑病・葉枯病	全県	—	平年並	やや多い
	ネギアザミウマ	全県	—	多い	多い
	ネギハモグリバエ	全県	—	少ない	やや少ない
	シロイチモジヨトウ	全県	—	—	やや多い
きゅうり	黒星病	全県	—	少ない	やや少ない
	炭疽病	全県	—	少ない	平年並
	褐斑病	全県	—	少ない	平年並
キャベツ (秋冬どり)	黒腐病	全県	—	平年並	平年並
	コナガ	全県	—	やや多い	多い
	モンシロチョウ	全県	—	平年並	多い
	ヨトウガ	全県	—	平年並	平年並
	アブラムシ類	全県	—	少ない	平年並
トマト	灰色かび病	全県	—	やや多い	多い
	葉かび病	全県	—	平年並	やや多い
	コナジラミ類	全県	—	やや少ない	平年並
りんご	斑点落葉病	全県	—	平年並	やや多い
	黒星病	全県	—	少ない	平年並
	炭疽病	全県	—	やや少ない	平年並
	輪紋病	全県	やや早い	平年並	平年並
	褐斑病	全県	—	平年並	やや多い
	シンクイムシ類	県北部	—	やや多い	やや多い
		県中央部・県南部	—	多い	やや多い
	ナミハダニ	全県	—	多い	多い
	リンゴハダニ	全県	—	平年並	やや多い
果樹カメムシ類	全県	—	平年並	やや多い	
な し (日本なし)	黒星病 (秋型病斑)	県北部・県中央部	—	平年並	やや多い
	黒斑病	県北部・県中央部	—	平年並	平年並
	輪紋病	県北部・県中央部	やや早い	平年並	平年並
	シンクイムシ類	県北部・県中央部	—	やや多い	やや多い
	ナミハダニ	県北部・県中央部	—	平年並	やや多い
	リンゴハダニ	県北部・県中央部	—	やや少ない	平年並
	果樹カメムシ類	県北部・県中央部	—	平年並	やや多い
ぶどう	べと病	県南部	—	平年並	やや多い
	晩腐病	県南部	—	平年並	平年並

Ⅲ. 発生予報と防除対策

A 水稲

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 斑点米カメムシ類 (アカスジカスミカメ)	—	多い (前年より多い)
(アカヒゲホソミドリカスミカメ)	—	多い (前年より多い)
	—	やや多い (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている (/+)。

イ、8月4～5半旬の抽出ほ場調査 (県内80地点中54地点) における斑点米カメムシ類の水田内すくい取り数 (20回振り) は平均1.3頭 (平年1.1頭)、発生地点率は26% (平年24%)、種別に見るとアカスジカスミカメが大部分を占めた。特に、水田内にノビエやカヤツリグサ科雑草が発生しているほ場でアカスジカスミカメの発生が多かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、本年は出穂期が2日程度早く、これまでの登熟期間が高温で推移したことから、割刈の発生は多くなると予想されるため、8月19日発行の注意報第2号を参照して防除する。

イ、本年の水稲の成熟期は早くなると予想されるため、2回目防除薬剤の使用時期に十分注意する。

B 大豆

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. フタスジヒメハムシ	—	やや少ない (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている (/±)。

イ、8月4～5半旬の巡回調査における株当たり成虫数は0.0頭 (平年0.2頭) でやや少なかった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発ほ場ではアグロスリン乳剤等で防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. マメシクイガ	—	やや少ない (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、8月4～5半旬の巡回調査における成虫の叩き出し数は0.6頭 (平年1.2頭) でやや少なく、発生地点率は12.0% (平年27.3%) でやや低かった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、連作により密度が高まり被害が増大するため、連作ほ場の防除を徹底する。

イ、薬剤は次のいずれかで散布する。

- ① 8月末に防除を行っていない場合はアグロスリン乳剤、アディオオン乳剤、パーマチオン水和剤を9月上旬に1回散布する。
- ② エルサン乳剤、サイアノックス剤、スミチオン乳剤、トレボン剤、プレバソフロアブル5は9月上旬に1～2回散布する。なお、前年多発したほ場では2回散布とする。
- ③ 無人ヘリで防除する場合はスミチオン乳剤、トレボンスカイMC、プレバソフロアブル5を9月上旬に2回散布する。ただし、トレボン剤、プレバソフロアブル5の総使用回数に注意する。

ウ、薬剤は莢によく付着するように散布する。

C ねぎ（秋冬どり）

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. さび病	—	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ、8月4半旬の巡回調査における発病株率は0.8%（平年3.6%）でやや低かった（ /-）。
- ウ、夏どりねぎの7月4半旬の巡回調査における発病株率は11.6%（平年6.8%）でやや高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、夏どりねぎの被害残さをほ場で処分する。
- イ、多発すると防除効果が劣るので発病前の防除に努める。発病が見られる場合は、直ちにアミスター20フロアブル、オンリーワンフロアブル等を散布する。アミスター20フロアブルは近接散布するとねぎを湾曲させる薬害を生じる場合があるので、散布間隔を2週間以上とする。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. 黒斑病・葉枯病	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ、8月4半旬の巡回調査における発病株率は8.3%（平年7.7%）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、降雨が続くと発病しやすいので予防や発病初期の防除に努める。
- イ、肥料切れや生育後期など草勢が衰えてくると多発するので注意する。
- ウ、べと病やさび病の病斑跡や害虫の食害痕に二次的に感染する場合があるので防除に努める。
- エ、本県における秋季の発生は葉枯病が主である。葉枯病が原因となる黄色斑紋病斑は収穫物の品質低下の要因となるため、アミスター20フロアブル、ダコニール1000、テーク水和剤を組み合わせ、9月上旬～10月上旬に約10日間隔で散布する。アミスター20フロアブルは近接散布するとねぎを湾曲させる薬害を生じる場合があるので、散布間隔を2週間以上とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. アザミウマ類 (ネギアザミウマ)	—	多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量は平年並か多いと予報されている (/+)。

イ、8月4半旬の巡回調査における被害株率は78.8% (平年37.4%) で高かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生源となるほ場周辺及びほ場内の雑草除去に努める。

イ、発生密度の低減を図るために、7～10日間隔でアルバリン顆粒水溶剤・スタークル顆粒水溶剤、スピノエース顆粒水和剤、ダントツ水溶剤、ディアナSC等を散布する。

ウ、多発しているほ場では、表土中のさなぎからの羽化や葉肉内の卵のふ化により、薬剤による防除後も発生密度が低下しない場合があるため、7～10日間隔で2～3回薬剤を散布する。

エ、薬剤感受性の低下を回避するため、同一薬剤、同一系統薬剤の連用を避け、系統の異なる薬剤をローテーションして使用する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. ネギハモグリバエ	—	やや少ない (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量は平年並か多いと予報されている (/+)。

イ、8月4半旬の巡回調査における被害株率は0.7% (平年28.0%) で低かった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ネギアザミウマに準じる。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. シロイチモジヨトウ	—	やや多い (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い、降水量は平年並か多いと予報されている (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発すると防除効果が劣るので、発生初期からアグロスリン乳剤、アタブロン乳剤、アディオ乳剤、カスケード乳剤、ゼンターリ顆粒水和剤、ノーモルト乳剤等を散布する。

D きゅうり

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 黒星病	—	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い（ /-）、降水量は平年並か多い（ /±）と予報されている。

イ、8月4半旬の巡回調査における発病株率は0%（平年3.3%）で低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、冷涼多湿条件で発病が多くなるため、山間高冷地では予防に努める。

イ、発病前から定期的にジマンダイセン水和剤、ダコニール1000等を散布する。発病が見られる場合は、整枝・摘葉を適切に行い、速やかにスコア顆粒水和剤、トップジンM水和剤等を散布する。

ウ、翌年の発病を防ぐため、栽培終了後の株はほ場外で処分し、支柱等の各種農業資材はケミクロンG等で消毒する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 炭疽病	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い（ /+）、降水量は平年並か多い（ /±）と予報されている。

イ、8月4半旬の巡回調査における発病株率は1.4%（平年11.7%）で低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病した葉、茎、果実は早めに除去し、ほ場外で処分する。

イ、発病前からの予防散布に努める。発病が見られる場合は、アミスター20フロアブル、ゲッター水和剤等の治療効果がある薬剤を散布する。また、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は薬剤の散布間隔を短くする。

ウ、薬害防止のため、アミスター20フロアブルは浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用を避ける。

エ、ベンゾイミダゾール系剤、QoI剤（ストロビルリン系剤）は耐性菌出現回避のため連用を避ける。

オ、翌年の発病を防ぐため、栽培終了後の株はほ場外で処分し、支柱等の各種農業資材はケミクロンG等で消毒する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 褐斑病	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い（ /+）、降水量は平年並か多い（ /+）と予報されて

いる。

イ、8月4半旬の巡回調査における発病株率は11.8%（平年21.5%）で低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病した葉は早めに取り除き、ほ場外で処分する。

イ、発病前からシトラノフロアブル、ジマンダイセン水和剤、セイビアーフロアブル20、ダコニール1000等による予防散布に努める。発病が見られる場合は、スミブレンド水和剤等の治療効果がある薬剤を散布する。

ウ、チオファネートメチル剤、ジエトフェンカルブ剤、ボスカリド剤、アゾキシストロビン剤では耐性菌が確認されているため、散布しても効果が低い場合は異なる系統の薬剤を選択する。

エ、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は薬剤の散布間隔を短くする。

オ、翌年の発病を防ぐため、栽培終了後の株はほ場外で処分し、支柱等の各種農業資材はケミクロンG等で消毒する。

E キャベツ（秋冬どり）

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. 黒腐病	-	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高い（ /-）、降水量は平年並か多い（ /±）と予報されている。

イ、8月4半旬の巡回調査における発病株率は0%（平年0%）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、害虫の食害部分からも病原菌が侵入するため、害虫防除を徹底する。

イ、銅水和剤（ヨネポン水和剤、Zボルドー、カスミンボルドー）などを散布する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. コナガ	-	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている（ /+）。

イ、8月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0.16頭（平年0.08頭）でやや多かった（ /+）。

ウ、秋田市予察ほにおける8月5半旬の株当たり産卵数は0.50個（平年0.27個※）で平年並であった（ /±）。

※過去3カ年の平均

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生初期で幼虫の密度が低いときは、遅効性で残効が長い昆虫成長制御剤（IGR剤）又はBT剤を散布する。

イ、発生が多くなってきたら、ネライストキシシン系剤、アフアーム乳剤、コテツフロアブル、スピノエース顆粒水和剤、ディアナSC、トルネードエースDF、フェニックス顆粒水和剤、プレバ

ソフフロアブル5等を散布する。なお、フェニックス顆粒水和剤及びプレバソフフロアブル5は2週間程度の残効があるため、防除回数を減らすことができる。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. モンシロチョウ	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている（ /+）。

イ、8月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0.02頭（平年0.03頭）で平年並であった（ /±）。

ウ、秋田市予察ほにおける8月5半旬の株当たり産卵数は5.60個（平年2.37個※）で多かった（ /+）。

※過去3カ年の平均

(2) 防除上注意すべき事項

ア、コナガとの同時防除に努める。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. ヨトウガ（第2世代）	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、8月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭（平年0頭）で平年並であった（ /±）。

イ、秋田市予察ほにおける8月1～5半旬のフェロモントラップの総誘殺数は1頭（平年0.8頭）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、老齢幼虫になると薬剤が効きにくくなるため、若齢幼虫のうちに防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. アブラムシ類 （モモアカアブラムシ）	—	平年並（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている（ /+）。

イ、秋田市予察ほにおける8月5半旬の発生株率は20.0%（平年76.7%※）で低かった（ /-）。

※過去3カ年の平均

(2) 防除上注意すべき事項

ア、抵抗性出現回避のため、同一系統薬剤の連用を避ける。

6. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
ハスモンヨトウ	—	平年並	平年並	コナガとの同時防除を行う。

F トマト

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. 灰色かび病	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、8月中旬の巡回調査における発病株率は0.5%（平年0.2%）、発病度は0.1（平年0.0）でいずれもやや高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多湿時に発生しやすいので、ハウス内の換気に努める。

イ、発病部位は早期に除去し、ほ場外で処分する。

ウ、発病前からの薬剤散布に努める。発病を確認した場合は、ゲッター水和剤、スミブレンド水和剤等の治療効果のある薬剤を散布する。

エ、ベンゾイミダゾール系剤、ジカルボキシイミド系剤の耐性菌が確認されているため、薬剤の選択に注意する。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. 葉かび病	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、8月中旬の巡回調査における発病株率は38.3%（平年26.8%）で高く、発病度は9.6（平年13.5）でやや低かった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、過度のかん水を避け、多湿にならないようにする。

イ、肥料切れを避ける。

ウ、潜伏期間が約2週間と長いので、早めの予防散布に努める。発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル、トリフミン水和剤等の治療効果のある薬剤を葉裏にもかかるように散布する。

エ、耐性菌出現回避のため、同一系統薬剤の連用を避ける。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. コナジラミ類 (オンシツコナジラミ)	—	平年並 (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている (/+)。

イ、北秋田市予察ほにおける8月下旬の発生株率は2.0% (平年17.3%) でやや低かった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ハウス内外の除草を行う。

イ、摘葉後は、残さを早期に処分する。

ウ、多発すると防除効果が劣るので、発生初期からアディオン乳剤、アドマイヤー水和剤、ノーモルト乳剤、モスピラン顆粒水溶剤等を散布する。

G りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 斑点落葉病	—	やや多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている (/+)。

イ、8月中旬の巡回調査における発病葉率は3.0% (平年2.6%)、発病地点率は81.8% (平年85.2%) でいずれも平年並であった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

イ、9月中旬以降も高温・多雨の多発条件が予想される場合は、9月中旬にも薬剤を散布する。

ウ、Q o I 剤は耐性菌出現回避のため、年間2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 黒星病	—	平年並 (-)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている (/+)。

イ、8月中旬の巡回調査における発病新梢率は0.1% (平年4.0%*) で低く、発病果率は0.1% (平年0.5%*) でやや低かった。発病地点率は18.2% (平年24.2%*) で低かった (/-)。

※過去3年間の平均

(2) 防除上注意すべき事項

ア、7月11日発行の防除対策情報第4号を参照する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 炭疽病	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、8月中旬の巡回調査における発病果率は0%（平年0.0%）、発病地点率は0%（平年1.8%）
でいずれもやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、日焼け果は発病しやすいため摘果する。

イ、二次感染防止のため発病果は直ちに摘み取り、土中に埋める。

ウ、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

エ、9月中旬以降に降雨が続くと予想される場合は、9月中旬にも薬剤を散布する。

オ、Q o I 剤は耐性菌出現回避のため、年間2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. 輪紋病	やや早い（-）	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている（-/±）。

イ、主な感染期間である6月の降水量は多く（ /+）、7月の降水量はかなり少なかった（ /-）
ため、感染量は概ね平年並であったと推定される（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、伝染源であるいぼ病斑の多い枝は切除し、適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. 褐斑病	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、8月中旬の巡回調査における発病新梢率は0%（平年0%）、発病地点率は0%（平年0%）
でいずれも平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

イ、現在、葉での発病が確認され、かつ9月中旬以降に降雨が続くと予想される場合は、9月中旬
にも薬剤を散布する。

ウ、Q o I 剤は耐性菌出現回避のため、年間2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	—	県北部 やや多い (前年より多い) 県中央部・県南部 やや多い (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている (/+)。

イ、大館市の防除適期決定ほにおける8月1～4半旬のモモシンクイガフェロモントラップへの総誘殺数は91頭 (平年62頭) でやや多かった (/+)。

ウ、県南部の防除適期決定ほ (2か所) における8月1～4半旬のモモシンクイガフェロモントラップへの総誘殺数は152頭 (平年92頭) で多かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は見つけ次第直ちに摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、成虫の飛来が多く、夜温が産卵条件 (20～22時の気温が18℃以上) を満たす日が続く場合はネオニコチノイド剤等を散布する。薬剤散布の際は、収穫前日数に注意する。

ウ、アルバリン顆粒水溶剤とスタークル顆粒水溶剤は同一成分の薬剤であるため、総使用回数に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. ナミハダニ	—	多い (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている (/+)。

イ、8月中旬の巡回調査における1葉当たりの成幼虫数は1.19頭 (平年0.34頭) で多く、発生地点率は86.4% (平年37.7%) で高かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生の多い園地では、越冬態が見られる前にオマイト水和剤、コロマイト乳剤等を散布する。薬剤散布の際は、収穫前日数に注意する。

イ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつ同一系統又は作用点が同一の剤は年間1回の使用とし、効力低下を防止する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
8. リンゴハダニ	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている (/+)。

イ、8月中旬の巡回調査における1葉当たりの成幼虫数は0.01頭 (平年0.04頭) 、発生地点率は9.1% (平年10.5%) でいずれも平年並であった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生の多い園地では防除する。

イ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつ同一系統又

は作用点が同一の剤は年間1回の使用とし、効力低下を防止する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
9. 果樹カメムシ類 (クキカメムシ、チャバネオカメムシ)	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている (/+)。

イ、防除適期決定ほ (4か所) における8月1～4半旬のチャバネオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の総誘殺数は27頭 (平年58頭) で平年並であった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内への飛来時期は年次変動が大きく、飛来数は園地によって異なるので、飛来状況をよく観察する。山間部や林地に隣接する園地では特に注意する。

イ、園内への飛来が多い場合は、ネオニコチノイド剤、合成ピレスロイド剤のいずれかを散布する。薬剤散布の際は、収穫前日数に注意する。

ウ、アルバリン顆粒水溶剤とスタークル顆粒水溶剤は同一成分の薬剤であるため、総使用回数に注意する。

H なし (日本なし)

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 黒星病 (秋型病斑)	—	やや多い (—)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている (/+)。

イ、8月中旬の巡回調査における発病新梢葉率は0.09% (平年0.14%)、発病果率は0.7% (平年1.1%) でいずれも平年並、発病果そう葉率は0.10% (平年0.19%) でやや低かった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病部位は直ちに切除し、適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 黒斑病	—	平年並 (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている (/±)。

イ、8月中旬の巡回調査における発病新梢葉率は8.2% (平年18.4%) でやや低く、発病果率は0% (平年1.4%) で平年並であった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、徒長枝及び発病が見られる枝は切除し、適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 輪紋病	やや早い (-)	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている (-/)。

イ、8月中旬の巡回調査における被害果率は0% (平年0%) で平年並であった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、伝染源であるいぼ病斑の多い枝は切除し、適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	-	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている (/+)。

イ、県内4か所の防除適期決定ほにおける8月1～4半旬のモモシンクイガフェロモントラップへの総誘殺数は384頭 (平年296頭) でやや多かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は見つけ次第直ちに摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、成虫の飛来が多く、夜温が産卵条件 (20～22時の気温が18℃以上) を満たす日が続く場合はネオニコチノイド剤等を散布する。薬剤散布の際は、収穫前日数に注意する。

ウ、アルバリン顆粒水溶剤とスタークル顆粒水溶剤は同一成分の薬剤であるため、総使用回数に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. ナミハダニ	-	やや多い (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている (/+)。

イ、8月中旬の巡回調査における1葉当たり成幼虫数は0.03頭 (平年0.07頭) 、発生地点率は27.3% (平年26.2%) でいずれも平年並であった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生の多い園地では、越冬態が見られる前に防除する。薬剤散布の際は、収穫前日数に注意する。

イ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつ同一系統又は作用点が同一の剤は年間1回の使用とし、効力低下を防止する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. リンゴハダニ	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている（ /+）。

イ、8月中旬の巡回調査における1葉当たり成幼虫数は0頭（平年0.00頭）でやや少なく、発生地点率は0%（平年8.4%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生が多い園地では防除する。薬剤散布の際は、収穫前日数に注意する。

イ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつ同一系統又は作用点が同一の剤は年間1回の使用とし、効力低下を防止する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ、チャバネカメムシ)	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は平年並か高いと予報されている（ /+）。

イ、県内4か所の防除適期決定ほにおける8月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへのカメムシ類の総誘殺数は13頭（平年24頭）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内への飛来時期は年次変動が大きく、飛来数は園地によって異なるので、飛来状況をよく観察する。山間部や林地に隣接する園地では特に注意する。

イ、園内への飛来が多い場合は、ネオニコチノイド剤、合成ピレスロイド剤のいずれかを散布する。薬剤散布の際は、収穫前日数に注意する。

ウ、アルバリン顆粒水溶剤とスタークル顆粒水溶剤は同一成分の薬剤であるため、総使用回数に注意する。

I ぶどう

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. べと病	—	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ、8月中旬の巡回調査における巨峰の発病葉率は0%（平年0.47%）、発病果房率は0%（平年0%）でいずれも平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、欧州系品種の他、巨峰などの大粒種、スチューベンで発生が多くなりやすい。

イ、発生が多い園地では、銅剤を散布する。

ウ、翌年の伝染源となる落葉は、土中に埋めるなど適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 晩腐病	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、8月中旬の巡回調査における巨峰の発病果房率は0%（平年0.07%）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病した果粒は摘み取り、適切に処分する。

イ、翌年の伝染源となる巻きひげや枝に残っている穂梗の基部は切除後、土中に埋めるなど適切に処分する。

IV. 気象予報

令和元年8月22日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報（8月24日～9月23日）

(1) 予想される向こう1か月の天候

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、平年並の確率50%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

(2) 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(東北日本海側)

	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	20%	40%	40%
降 水 量	20%	40%	40%
日 照 時 間	40%	40%	20%

(3) 気温経過の各階級の確率

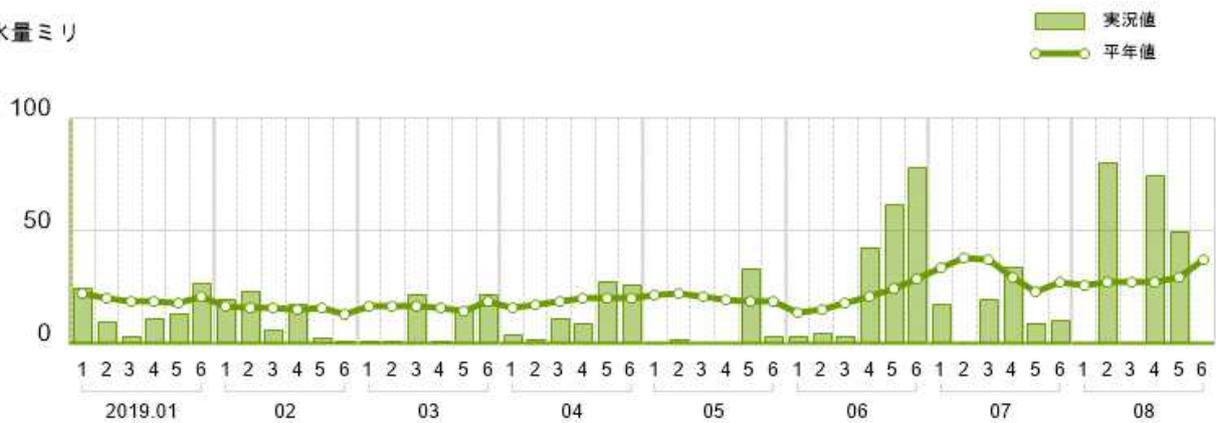
	低い	平年並	高い
8/24～8/30	20%	50%	30%
8/31～9/6	20%	50%	30%
9/7～9/20	20%	40%	40%

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～8月5半旬 秋田県農業気象システムより)

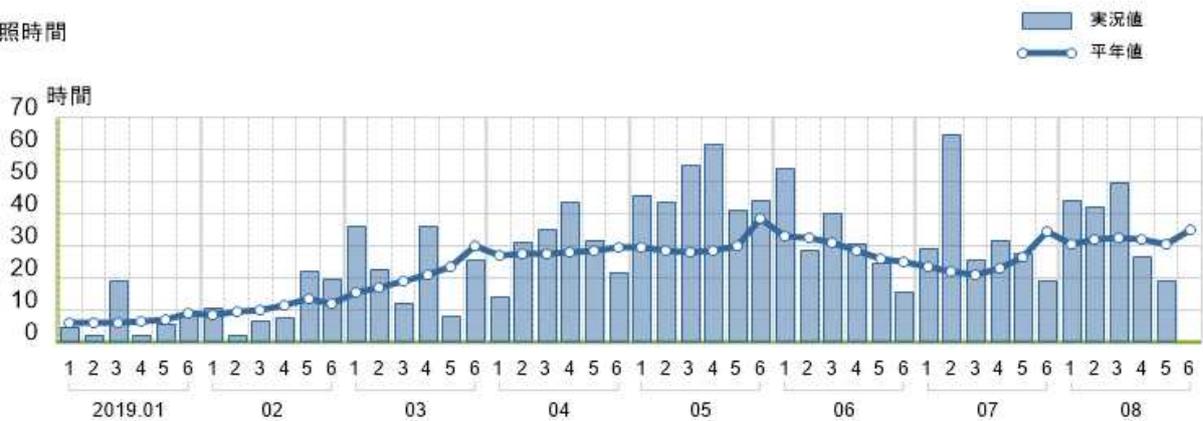
気温℃



降水量ミリ



日照時間



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生日日からの差を5段階評価で予測します。

日数	~-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	+1	+2	+3	+4	+5	+6~
評価	早い	やや早い		平年並				やや遅い		遅い			

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

平年値 ↓						
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期が「遅い」場合は「+」、「早い」場合は「-」となります。発生量が「多い」場合は「+」、「少ない」場合は「-」となります。

発生時期、発生量ともに、「平年並」の場合は「±」、関係しないときは「空欄」となります。

気象の確率予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50%以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50%以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20%で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40%の場合は「平年並か高い（多い）」、高い（多い）と平年並が40%で低い（少ない）が20%の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30~40%の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解 説
高い(多い)確率が50%以上 (20:40:40)	高い(多い) 平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上 (40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	平年並 ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

農薬の適正使用・管理の徹底を！

農薬使用にあたっては、十分注意のうえ、安全かつ適正に使用してください。

○安全使用の基本事項

- ・農薬の使用基準を遵守する。
- ・病虫害の発生状況を把握し、必要最小限の農薬を使用する。
- ・防除履歴を必ず記録する。

○農薬使用上の注意

- ・農薬の散布時には周辺作物に飛散（ドリフト）させない。
- ・家畜・蜜蜂等に影響のある農薬を使用する場合は、地域内の畜産農家及び養蜂業者と緊密に連携し、散布日時や散布地域、使用農薬の種類等を散布前に十分周知する。
- ・農薬散布後は散布器具の洗浄を徹底する。
- ・特に、土壌くん蒸剤は使用上の注意事項を遵守する。
- ・農薬散布時の装備と体調は万全にする。

○農薬の取扱い上の注意

- ・農薬は保管庫に入れ、施錠して保管する。
- ・農薬を他の容器（清涼飲料水の容器等）へ移し替えない。